

*It*の連続体: 外部照応 *It*から *It*分裂文まで

湯本 久美子

yumoto@luce.aoyama.ac.jp

キーワード: *It* 連続性 定性 非人間性 Imposter 性

要旨

本論では、外部照応・内部照応の“it”、impersonal it 文および It 分裂文の“it”は連続体を成していると考え、「何が」そして「どのように」連続しているのかを問うことを目的としている。最初に、外部照応の“it”を分析し、A 定性・B 非人間性・C Imposter 性（文法的形式と指示的価値のミスマッチ）の3つの特質を確認する。次にこれらのA・B・Cの特質が内部照応の“it”、impersonal it 文そして It 分裂文の各々の特徴とどのような関わり合いを持っているかを考察していく。分析の結果、各々の特徴とA 定性・B 非人間性・C Imposter 性そしてそれぞれの拡張特質—広指示性・非ダイクシス性・トピック性・弱人間性—との密接な繋がりが観察され、そのことにより外部照応、内部照応、impersonal it 文および It 分裂文の“it”には連続性があると考えられることを述べる。本論は、“it”が指示的意味を持っており(Langacker 2007/2011)、語彙と文法は連続体であるという認知文法の主張(Langacker 2008:5)に沿うものである。

1. はじめに

本論では外部照応¹（下記②）、内部照応（下記①）、impersonal it 文（下記③・④）、It 分裂文（下記⑤）の“it”を分析対象とする。これらの“it”が連続体を成している可能性があると考え、それでは「何が」そして「どのように」連続しているのか、その答えの手がかりを求めることを目的としている。

まず、“it”について、Thavenius (1983:56)は次の順番で7つのメインカテゴリーを挙げている。カテゴリーの日本語訳は筆者によるものである。

- | | |
|--|---|
| ① endophoric reference (textual reference) | 内部照応 Thavenius (1983:56) |
| (1) John gave me <u>a book</u> and I took <u>it</u> . | (2) <u>John</u> looked at me; I didn't like <u>it</u> . |
| ② exophoric reference (reference outside the text) | 外部照応 |
| (3) What is <u>it</u> ? (referring to something heard) | (4) What's <u>it</u> like here? <u>It's</u> pretty bad. |
| ③ expressions denoting time, distance, or atmospheric conditions | 時・場所・天候 |

¹ “exophoric reference”と“endophoric reference”の日本語訳として『新英和大辞典』及び『リーダーズブラス』に基づき、そして、それぞれテキストの「外部」・テキストの「内部」との照応という意味で「外部照応」・「内部照応」の用語を用いる。

- | | |
|---|---|
| (5) <u>It's</u> two o'clock. | (6) <u>It's</u> raining. |
| ④ extraposition | 外置 |
| (7) <u>It's</u> impossible to find him. | (8) <u>It's</u> no use shouting at him. |
| ⑤ cleft constructions | 分裂文 |
| (9) <u>It</u> was John who played. | (10) <u>It</u> is this picture I want. |
| ⑥ Idiomatic expressions | イディオム |
| (11) Rough <u>it</u> . | (12) Hit <u>it</u> off. |
| ⑦ tag questions | 付加疑問 |
| (13) The book is interesting, isn't <u>it</u> ? | (14) Food isn't cheap, is <u>it</u> ? |

しかし、上述の整理方法を誰もが認めているわけではない。例えば、Wales (1996:47)は、このような多岐に渡る “it” の働きについて “Many grammarians have attempted to classify these functions, with no consensus emerging from this difficult task.” と、“it”²の文法的・意味的機能の分析の難しさ故にその機能についてのコンセンサスは無く、一致した見解がないことから “anticipatory *it*”、“prop *it*”、“introductory *it*”等の様々な用語³が導入されていると説明している。

そして、⑤の *It* 分裂文を分析している Patten (2012:1)も “Equally problematic is the role of initial *it*. Is this an expletive dummy subject and if so, why is it there? Does it operate as a syntactic placemaker and if so, for which element? Or is the constituent *it* related in a different way to other elements in the sentence?” と、文頭の “it” の働きに疑問を投げかけている。その “a dummy subject” と呼んでいる一人が Huddleston & Pullum (2002:1403)であり、④の主語位置にある “it” は文字通り意味が無いと考えている。

しかし、逆の見方もある。Langacker (2011:179)は、③と④の “it” を “impersonal *it*” と呼び、意味を持っていると主張している。同じく、Wales (1996:47)も “it” は意味を持っており、かつ多様な用法間には連続性が見られると主張している⁴。

What is thus implied is that pronouns normally do not have ‘lexical’ meaning; only nouns do. Yet it must be noted here (for amplification in chapter 2) that, semantically speaking, it is difficult to draw such a clear-cut distinction, and that it is preferable to envisage a cline or continuum of lexical meaning, with the so-called ‘prop *it*’ at one end, and numerous and various quite precise uses at the other. Wales (1996:9-10)

² Wales (1996:1)の説明によると、英語における代名詞の定義はそれが最初に英語に現れた 16 世紀からほとんど変わっておらず、ラテン語 *pro-nomen* とギリシャ語 *antonomasia* (*standing for a noun*)に基づいている、とのことである。つまり、“standing for noun or a substitute for a noun”、名詞の代わりの表現というのが “it” の意味であり、それ以上の意味は持たないという見方をこの定義は示していると思われる。

³ Quirk, etc. (1985:347)は、“it”について次のように説明している。“Since *it* is the most neutral and semantically unmarked of the personal pronouns, *it* is used as an ‘empty’ or ‘prop’ subject, especially in expressions denoting time, distance, or atmospheric conditions.”

⁴ Wales (1996:47) は “These functions (=anticipatory *it*, introductory *it* 等のいわゆる意味が無い empty とされている “it” を意味する), and also ‘cleft *it*’, are beyond the scope of this work; as also are the idiomatic uses of *it*” と述べて、連続性の提言は行っているが、具体的な分析自体は行っていない。

As Bolinger says in the title of his article, ‘Ambient it is meaningful too’(1973). On a ‘cline’ or ‘continuum’(1.4; see also Bolinger 1973:268) these uses of *it* would like between ‘anticipatory *it*’ at one end (*It’s a pity that you lost*) and *it* to refer to objects, plants, animals, and human beings at the other (see Chapter 6).
Wales (1996:47-48)

例えば、Wales (1996:9-10)は、*The Longman Dictionary of English Language and Culture* (1992)が代名詞の “it”と名詞の “it”を別々に記載していることを取り上げ、連続体と見なすことが好ましいという意見を述べている⁵。品詞の異なる “it”は⑥イディオム表現とまとめられている用法の中に容易に見つかる。例えば、(11)の “Rough it”と (12)の “Hit it off”は『ルミナス英和辞典』によると全体として「不便な生活をする」・「そりが合う」という自動詞である。しかし、イディオムの範疇には鬼ごっこの「鬼」を意味する “I am it!”の “it”も含まれるであろうが、この品詞は『新英和大辞典』によると名詞である。であるならば、照応の “it”間のみならず、③/④/⑤の文頭の “it”との間にも連続性が潜んでいるのではないか、という見方が生まれるのはそれほど無理がないのではないだろうか。

しかし、“it”が意味を持ち、かつ連続体であるならば「何かが続いて」いなくてはならない。「何が」そして「どのように」連続しているのか、本論の目的はこの難問を解明するための手がかりを求めることにある。本論の分析の対象は、上記の②外部照応、①内部照応、③/④impersonal it 文、⑤It 分裂文の4つの用法の “it”である。⑥イディオム用法も適宜観察する。まず最も指示的用法が明白と考えられる外部照応 “it”の特質を抽出する。次にその特質から他の3用法/構文の特徴を説明していくという方法を取り、その中で「何が」が「どのように」連続しているのかを探していく。

分析の結果、外部照応 “it”の特質である高スキーマな **A 定性**・**B 非人間性**・**C Imposter 性**（文法的形式と指示的価値のミスマッチ）が拡張性質—広指示性・非ダイクシス性・トピック性・弱(defocusing)人間性—を伴いながら “it”の連続性を支えていると考えられること、又、It 分裂文には複数の種類があるが、それらの間にも同様の連続性が見られることを述べる。

本論の構成は次の通りである。2節では外部照応の “it”の特質を示した後に(2.1)、それらの特質に基づいて・内部照応の “it”(2.2)・impersonal it 文(2.3)・It 分裂文(2.4)の順番で各々の用法の特徴を考察する。3節は結論を述べる。

2. itの連続体

本節では外部照応の “it”の特質 — **A 定性**・**B 非人間性**・**C Imposter 性**（文法的形式と指示的価値のミスマッチ） - を考察した後(2.1節)、それらの特質と内部照応の “it”(2.1節)、impersonal

⁵ Wales (1996:9)は *The Longman Dictionary of English Language and Culture* (1992)が示している名詞 “it”の4または5つの「語彙的な意味」は互いに無関係ではなく、意味の連続性が見られると主張している。例えば、鬼ごっこの “it”は “the most important person in the children’s game”を意味し、Coca-Colaのスローガン “Coke is it”（最高・本当のモノ）と繋がっている。さらに、性的魅力をあらわす “it”はハリウッド映画からの “it-girl”から来ているが、性的な事柄を婉曲用法で表すことも関係している。さらに、“X do it+ adverbial phrase”という “the formulaic structure”についても言及している。この構文の場合、Xには職業が当てはまり、“Teachers do it with class.”, “Linguists do it with their tongues.”のように使われる。

it 文(2.3 節)、It 分裂文(2.4 節)の特徴がどのように関わっているのかを考察していく。

2.1. 外部照応 *it*

本節の目的は、外部照応の “it” の特質を探し求めることにあり、その考察の出発点を Langacker (2007) の次の見解に求めたい。Langacker (2007:176-177) は、三人称代名詞は、指示詞と定冠詞との類似性を（歴史的にも）持っており、それらに共通するのは「定」である、と述べている。三人称代名詞である “it” は話し手が想定する聞き手の同定可能性、つまり定性を示している。A 定性、まずこれを “it” の第一の特質として挙げる。

この “it” の定性の特徴について、Thavenius (1983:158) は “IT is a reference item of a more general kind than the other pronoun types. As a rule, IT does not refer to persons, even if there are occasional exceptions.” と述べている。つまり、“it” は①他のどの代名詞よりも一般性が高く、②かつ例外はあるが人間は指示しないという二点の特徴を持っている。

まず、① “a more general kind than the other pronoun types” から見ていくと、(15B) が示す様に、“this” または “that” のいずれで指示されたものでも “it” で指示することができ、“it” は話し手を中心とする空間的遠近の違いを必ずしも反映せず、また話し手の所有物を指示するという制限もない。さらに、過去に関するモノや事柄については “that” が “this” より好まれる傾向があると言われているが（新村 2006:36-37）、“it” は (16) のように現在時制とも過去時制とも相性が良く、時間的遠近を問わない場合が多い。そこから “it” は、その定指示の幅が広く、かつ話し手を中心とするダイクシス性を示していない、いわば中立の視点を示しているということになる。前者の特質を A 定性→広指示性、後者の特質を A 定性→非ダイクシス性、とまとめておく。以後、☐ を特質の拡張性質を表す記号として用いる。

(15) A: What is this/that/it? B: It's my/your new PC.

(16) B: It is/was expensive.

この広指示性はその指示幅の広さゆえ、次に見るように、指示の曖昧性をもたらすようである。Wales (1996:48) は環境問題のポスターのせりふ(17)について、動詞 “bin” とゴミ箱の絵から “it” の意味は非常に明白だが、それでも曖昧、“however ‘loose’ the reference of *it* appears”、と言っている。同様にマクドナルドの広告(18) “I'm lovin' it” の “it” がマクドナルドの商品をおそらく指示しているのだろうが、曖昧さが残るのは否めない。逆に、この曖昧さから豊かな解釈が生まれ、それが他の広告（例えば、「キャノン」の広告 “Make it possible with Canon”）にも “it” の使用が好まれる理由なのだろう。加えて、(17-18) は外部照応なのか内部照応なのか、判断にも曖昧性が残るのではないだろうか。

(17) Don't bin *it*, bag *it* (June 1994)

Wales (1996:48)

(18) マクドナルドの広告 I'm lovin' it.

次に② “IT does not refer to persons”、“it”は人間を指示しないという点を確認する。Thomas (1995:112-114)が「生物を区別しない代名詞を人間に対して用いることは原則許されない」と述べているように、“it”はもっぱら無生物の指示に用いられる。この指示対象属性を **B 非人間性** と呼ぶこととする。興味深いことに、この **B 非人間性** は次に述べる多面的な姿を示し、“.....even if there are occasional exceptions”と「例外」扱い等できないほど多様で興味深い。

まず、Thomas は “it”が人間を指示できる例外として性別のわからない赤ちゃんや死体等を挙げているが、性別がわからない赤ちゃんや動物を指示する場合でも相手への礼儀を考え“it”の使用を避ける(Thomas 1995:114)とのことである。つまり、“it”は、英語母語話者にとり “non-human/non-animate”、即ち “in-animate”であり、文法家が考えるよりかなり「ひどい」表現とのことである(Wales 1996:159)。

「ひどい」表現である“it”の暗示的意味は “unknown, unemotional, empty...”等、ほぼ否定的なことばかりであり、その例として Wales (1996:160)は *It's alive* という 1973 年の映画でモンスターのバンパイアベイビーが “It”と呼ばれていたことにも見ることができると述べている。そして Thomas(1995:118)も、ある人が遊び相手の女性を繰り返し “it”で指示することによりその女性を「もの」の地位に貶めたという報道実例を示し “it”の「ひどさ」を示している。この様に人を指示して「もの」に貶める “it”を「軽卑」の表現と呼んでおく。

しかし、不思議なことに、この “it”は電話での会話においては全く別な働きを示す。Fillmore (1977:120)は自己紹介で自分を指すことばとして、“it, this, I'm, my name”の4つを挙げているが、この順番は聞き手が話し手を同定できる容易さの順番だと述べている。例えば、“it”⁶は聞き手が自分の声を容易に認識できることを知っている場合、つまり「知っている期待値の高い声」の場合に使われ、いわば「親密さ」の表れである。一方、“my name”は相手が自分の声を聞いたことがないと思う場合に使われる。

(19) It's me.

Fillmore (1977:120)下線は筆者による

(20) This is Chuck Fillmore.

Fillmore (1977:120)下線は筆者による

(21) I'm Chuck Fillmore.

Fillmore (1977:120)下線は筆者による

(22) My name is Chuck Fillmore.

Fillmore (1977:120)下線は筆者による

しかしながら、「親密さ」の “it”とは真逆の用法もあり、それは鈴木(1996:160)が「尊敬の三人称」と呼ぶものである。

(23) ホテルの部屋にいるときに誰かがドアがトントんとたたいた。

⁶ 2015年5月のオバマ米国大統領の初ツイッターは “Hello, Twitter! It's Barack.”で始まっている。

それに対して室内の客が相手を問う場面での発話： Who is it?

鈴木(1996:155)はもしこのような場合に “Who are you?”と問えば、部屋の中の人、外来者の素性、資格、正体などについて疑いの気持ちを抱き、詳しい情報をもとめる、やや詰問調の言い方になってしまうと説明している。そして、鈴木(1996:159-160)は、「一般に相手の素性や名前が分からないとき、あるいはそれに自信がないとき、ヨーロッパ語では三人称を使うことが多い。」と述べ、そこから逆に自信があってもあたかもないかのように見せる使い方が生まれているとしている。そこに含まれる「一種の間接性が、相手に対する遠慮、敬意、尊敬の念といった心理の表明につながってゆく」と述べており、下記の例文はこの例である。「イシャウッド様とお見かけしますが？」という気持ちが表されていると説明している。

(24) The porter was standing at the door as I am panting up. Evidently he'd been on the look-out for me.
“It's Mr. Isherwood, isn't it?” Christopher Isherwood: *Prater Violet* 鈴木(1996:160)

上述の「軽卑」・「親密」・「尊敬」の3種の異なった用法は、下記に述べるように“it”の「人ではなく物を指示する」という性質—B 非人間性⁷の働きによるものと考えられる。

まず、「軽卑」と「親密」の表裏一体性の理解には「反転自称」と呼ばれる日本語の自称詞を他称詞として用いる用法⁷がヒントとなる。「手前」そして「僕」は、本来は話し手を指す自称詞であるが、(25)「てめえ」は相手を軽卑する表現であり、(26)「僕」の場合は逆に親密さの表現となっている。自称詞は話し手自身を指すものであるから、話し手にとり「近さ」を示すものである。この「近さ」は一方では親密表現に他方では軽卑表現になると解釈できる。

(25) けんか相手に：てめえ！

(26) 小さな子供に：僕のお名前は？

同様に、“it”が人に使われた場合には、物を指示するという本来の性質から軽卑表現になりその「近さ」の裏返しが親密表現となると考えられる。

次に、本来は場所を示す日本語を用いた「どちら様ですか。」も“it”の「尊敬」表現の解釈のヒントとなる。この場合の「どちら様」は、人間を人間として捉えずに場所として捉えることにより「遠さ」を表し、そのことにより丁寧さ・尊敬の念を示している表現である。(23)“Who is it?”も同じメカニズムと考える。本来、物を指示し、かつ話し手中心のダイクシス性を示さない“it”を用いることにより、未だ相手を自分の会話の対象として勝手に捉えていない遠慮を示す(湯本 2015)。それにより(23)は丁寧な表現となっていると考えられる。

⁷ 松本(2010:26)は、日本語「オノレ・テマエ・ワレ」の自称代名詞が話し相手に向けられている用法は日本語を含めた太平洋沿岸系諸言語に深く根差した特質の一つと説明している。

この“Who is it?”には、①本来は物を示す文法形式を持つ “it”が指示している実体が人であるという「ずれ」、さらに、②本来は「定」であることが明白な物を指示する働きを持つ “it”が未だ話し相手として「定められていない何者か」である不定者を指示するというずれが見られる。この「ずれ」は後述するように人称代名詞には頻繁に見られるものである。

このずれを “mismatches between the grammatical forms of person markers and their referential value”、「文法的形式と指示的価値のミスマッチ」と Gardell (2015:10)は呼んでいる。「文法的形式と指示的価値のミスマッチ」はまた Collins and Postal (2012:217)が “pronominal imposter”と呼んでいるものとほぼ同じ概念である。

(27) An imposter is a notionally X person DP that is grammatically Y person, $X \neq Y$. Collins (2012:5)

Collins & Postal (2012:217) は、“pronominal imposter”の例として、“nurse we”を挙げている。“nurse we”は “I + you の inclusive”ではなく、意味的には二人称であり、子供に向かって “Aren’t we going to tidy our room today?”と言いながらも実際には子供のみが子供部屋の整理整頓することを依頼しており、“we”の実際の指示は聞き手のみである。“we”の文法的形式と指示的価値である「聞き手」との間のミスマッチである。この “we”に関しては、“royal we” (pluralis majestis) や “editorial we”が実際は “I”を示しているという例がよく知られている。

このような、話し手と聞き手を指示する英語表現における「文法的形式と指示的価値のミスマッチ」は “I”を除く全ての英語人称代名詞に非常に頻繁に見られるものである(湯本 2015)。いくつかの例を挙げよう。下記は、本来ならば第三者に相当する三人称表現が話し手自身を指示している表現である。

(28) ...though *yours truly* has tried to present his readers with a diverse variety of viewpoints, some very different from his Collins & Postal (2012:1)

(29) *Your humble servant* finds the time before our next encounter very long. Collins & Postal (2012:2)

(30) *This reviewer* was unable to strictly follow the logic of the submission. Collins & Postal (2012:2)

そして話し手自身を指す形式である“I”でさえも、例は少ないが(31)のような非人称用法を持っており、Kitagawa & Lehrer (1990:742)は “I”の非人称用法は仮定的コンテキストに多いと述べている (“Impersonal I is more limited in its distribution than *you* and *we* and seems to occur mainly in hypothetical contexts (Ken Safire, p.c.).”).そして、“I”の擬人化された用法⁸ (32)や(33)の用法も興味深い。各々の例文の下線は筆者による。

⁸ Wales(2015:97-102)は擬人化された “I”は広告やマーケティングにあふれていると述べている。

(1) Buy me, I am your new cheaper Morrisons.

Wales (2015:98)

(2) I’m a shopping-basket, please use me. (オーストラリアで遭遇したもの)

Wales (2015:102)

- (31) デカルトの “I think, therefore I am.” Kitagawa & Lehrer (1990:741)
 (32) Buy me now before you lose me forever. (スーパーマーケットにて) Wales (2015:99)
 (33) His I-love-me kind of attitude makes me shudder. 今井(2015: 149-150)

さらに、定形式と不定指示的価値のずれもめずらしくはない。例えば、(34)の “he”、(35)の “we”、(36)の “you”、そして(37)の “they”は各々文法的には定表現であるが、指示的価値は不特定な人々や人間一般を示している。各々の例文の下線は筆者による。

- (34) He fells two dogs with one stone. 奥津(2000:161)
 (35) In the 19th century we neglected our poor as we amassed wealth. Today we are much more concerned with the welfare of the people as a whole. Quirk, et al. (1985:350)
 (36) You can search the world over and never find a beer to match Kirin Lager for the richness of its flavor. ビーターセン(1990:71)下線は筆者による
 (37) (Iris) “..... I shall be all right to-morrow. Everything will be all right to-morrow.”
 (Anthony) “What touching faith. Don’t they say ‘to-morrow never comes’?”
 (Iris) “Don’t.” Agatha Christie. *Sparkling Cyanide*. pp.79-80 下線・話者名の付記は筆者による

逆に、本来は不定であるはずの形式が定を指すという場合もある。Wales (1980:95)は不定形式である “one”を3つに分類している。(i) one 1 がもっとも多い用法で不定の意味を持ち (38)がその例である。(ii)は話し手を含む総称表現である。最期に(iii) one 3 は特定人物を指示する定表現である。この One 3 の用法は上流階級⁹の会話に見られとされ、(39)がその例である。

- (i) one 1 = ‘indefinite’ one: includes ‘impersonal’ as well as true ‘generic’ uses: common in educated speech and writing;
 (ii) one 2 = ‘generic/egocentric’ one: includes speaker; common in educated speech and writing
 (iii) one 3 = ‘advanced egocentric’ one: a direct equivalent of I: prevalent among ‘upper class speakers’
 (38) In theory one could say the University of London is the last place in the country. Wales (1980:96)
 (39) Question:...Do you intend to make strikes in certain parts of the public sector illegal?
 Answer Mrs Thatcher¹⁰: Well, I remember it wartime just a little, and one has read about the history of some trade union matters, so I don’t think that is the way... Mühlhäusler & Harré (1990:198)

⁹ Wales (1996:92) はチャールズ皇太子の発話を紹介している。 “It was a sad moment leaving one’s family on the tarmac, waving one goodbye.” (Prince Charles, BBC 26, July 1981)

¹⁰ サッチャーは I know, I feel ではじめ、途中で代名詞を we, one にシフトすることがある。これは “distancing devices”であるとしてその効果を Mühlhäusler & Harré (1990:199)は次のように述べている。

In the use of *we* it is either the self who is speaking or the self in whose interest the addressee is supposed to act. Thus the dimension of control is an important one in the use of this pronoun. The transition from *we* to *one* and from *nous* to *on* would seem to be closely correlated with (a) diminished intimacy and (b) diminished responsibility. It is, as it were, as if the ego hides his or her intentions and desires in an anonymous mass.

加えて、本来は人間指示の人称代名詞が物を指示する場合もある。下記の例では 人間を指示する“we”が非人間である組織を指示している。これはメトニミーとも解釈できるだろう。

日本語では「自分の会社」と言う時に「わが社」「弊社」といった表現を用いるのが通例だが、英語には **our company** のような感覚はあまりない。

「わが社の運営はしっかりしています」

△*Our company is in good shape.* ○*We're in good shape.*

上記のように、自分の会社について言及する際には *We* を用いるのがもっとも適切である。なお、他の会社についても *their company* より *they* を用いたほうがよい。

Our company is in good shape. は文脈によっては「会社自体はいいのですが……」のような妙な「含み」を伴ってしまう可能性がある。たとえば、「会社はしっかりしているが、社長に財政的なトラブルがある」のように、何かと対比しているようなニュアンスがでてしまうからである。

セイン(2011:61-62)

「わが社は創業 350 年の歴史がある」

△*Our company was established 350 years ago.* ○*We were established 350 years ago.*

**Our company...* の場合、「私たちが持っている会社」、すなわち「私たちが下部を所有している会社」という意味にとられるおそれがある。

セイン(2011:63)

このように、「文法的形式と指示的価値のミスマッチ」は英語人称代名詞の大きな特徴の一つであり、けして「例外」というような軽い現象ではない。先ほど指摘した①“it”が示す文法的形式、つまり物指示という本来の働きと指示対象の実体価値が人であるというずれ、②本来は「定」であることが明白な物を指示する働きを持つ “it”が未だ話し相手として「定められていない何者か」不定者を指示するというずれ、これらは「文法的形式と指示的価値のミスマッチ」の表れである。この性質を “it”の3つ目の特質—**C Imposter 性**—として挙げたい。この **C Imposter 性** はこれまでもっぱら“social deixis”としての方策¹¹の一つとして捉えられており、“it”の意味分析の観点から議論されていなかったが、本論では “it”の働きを変える機能的性質としてクローズアップしたい。

以上の分析から、外部照応の “it”は、**A 定性**・**B 非人間性**・**C Imposter 性**の3つの特質を持つと考えられる。そして **A 定性**は→**広指示性**・→**非ダイクシス性**の拡張性質を持つ。

表 1 外部照応の “it”

A 定性 A 定性→広指示性(曖昧性を伴う) A 定性→非ダイクシス性	B 非人間性	C Imposter 性 —文法的形式と指示的価値のミスマッチ (人称代名詞の特徴)
Imposter 性 —文法的形式と指示的価値のミスマッチ ① “it”が示す文法的形式、つまり「物」指示という本来の働きと指示対象の実体価値が「人」であるというミスマッチ ② “it”が示す文法形式、つまり「定」指示という本来の働きと指示対象の実体価値が未だ話し相手として「定められていない何者か」という不定者であるというミスマッチ		

¹¹ Gardell & Sorlin (2015:10-12) は “social deixis”(話し手の聞き手に対する連帯・地位・世代・親密・感情等の表現)には3つの方策があると述べている。一番目の方策が “**imposter**”、二番目が明白な形式の使用をさげゼロ形式にするか非人称形式にすること、三番目が尊敬語の使用である。

2.2. 内部照応 *it*

本節では、内部照応の “it” を A 定性そして B 非人間性の順番で見っていく。

まず、A 定性に関して Thavenius (1983)のデータから確認していく。Thavenius (1983)は、三人称代名詞(he, she, they, it)を研究対象としており、その研究には “it”の使用頻度を示す統計的データが含まれている。The London-Lunch Corpus から選択された8つの会話がそのデータベースであり(p.50)、“referential”用法(the pronoun has the principal function of referring to a textual entity explicitly expressed in the conversation; or, directly to an extratextual entity in the physical setting or the abstract context-of-situation p.55)がデータの対象となっている。従って、下記の表2のデータは外部照応と内部照応の両方の “it”¹²を含み、表中の “IT”は合計を表している。

表2 Thavenius (1983:74) Tale 2. IT: Frequency of IT

Text	‘it’	‘this’	‘that’	IT
1.1	87	20	35	142 (12.4%)
1.3	71	42	7	120 (10.5%)
1.4	109	31	42	182 (15.9%)
1.5	70	10	26	106 (9.3%)
1.6	75	34	24	133 (11.6%)
1.8	96	17	51	164 (14.3%)
3.3	91	39	26	156 (13.3%)
3.4	76	42	23	141 (12.3%)
Column Total	675 (59.9%)	234 (20.5%)	234 (20.5%)	1144 (100%)

“this”と “that”の頻度は全体では同数であるが、個々のテキストではばらつきが見られる(p.75)。このばらつきに関して、Thavenius (1983:75-76)は先行研究及び自分の研究から、“this”は “own-reference”を、“that”は “other-reference”を好み、その傾向がテキスト内容の違いを反映してデータに現れていると説明している。一方、“it”の頻度は全てのテキストでほぼ同じである。このことから、“it”は “own/other-reference”の違いにさほど影響を受けない中立的かつ指示幅の広い指示代名詞ということがわかる。従って、前節で示した A 定性→広指示性と A 定性→非ダイクシス性はこのデータからも確認できるだろう。

この “it”の広指示性は、Kamio & Thomas (1998)の分析結果とも一致している。Kamio & Thomas (1998)は、“that”の “narrow reference” (指示集中性)に対して、“it”は “wide reference” (指示拡散性)を示すと述べている。“it”は指示幅が広いため、例えば(40)の例文の “it”の場合関連する事実や事柄、例えば、Sonja の両親のあれこれについても含まれる。一方、“that”は指示幅が狭いため、単に Sonja が誕生のときには両親が結婚していなかったことを話者が Sonja に伝えていない、ということのみを指すという違いがあると説明している。

¹² Thavenius(1983:158)は “it”の “referents”を3種に分けている。そして “it”の機能については、他の代名詞と同様に話し手間に共有されている状況を話し手が気づいていることを示すシグナルであり(p.156)、指示対象を “summing up”まとめる機能も持っている(p.157)と述べている。

1 a concrete object or an animal 2 an abstract idea or a phenomenon 3 the contents of a text passage

- (40) Sonja was born out of wedlock but I never revealed {it to her / that to her}.

Kamio & Thomas (1998:296)

さらに、Kamio & Thomas (1998:296)は“prior knowledge to the speaker”（典型的に話者が会話に入る前にすでにアクセスした情報）の有無が “it”の選択には鍵であることを主張し、例文(41)と(42)の違いをその例として示している。“it”は “prior knowledge to the speaker”が必要であるが、“that”は話者にとり “prior knowledge”を必要としない。従って、初めて話を聞く(41B1)の “it”は不適切であるが、(42B)は既に知識があることから適切ということになる。

- (41) [A rushes into the room excitedly] Bは何も知らない。

A: Guess what! I just won the lottery!

Kamio & Thomas (1998:291)

B1: *It's amazing!

B2: That's amazing!

- (42) [A rushes into the room excitedly] しかし、Aが家につくとBは賞金者の名前をすでにラジオで聞いておりAの発話はBにとり “prior knowledge”になっている。

A: Guess what! I just won the lottery!

Kamio & Thomas (1998:291)

B: (Yes,) it's amazing! I heard about it on the radio, and I've invited everyone on the block to our house for a party!

そして “it”の “prior knowledge”と “wide reference”には関連性があると説明している。“prior knowledge”とは既知・プロセス済情報のことであり、情報のプロセス行為において、当該情報は話し手の知識在庫の中にある他の関連する事実や事柄に組み込まれる。したがって、“it”は関連する事柄全体を指すことができる。この関連する事柄全体というのはかなり広い指示幅である。

この広指示幅のせいで、“it”の解釈は全体的にも又、局所的にも可能であり、曖昧さを引き起こす。Wales (1996:49)は “it”が前出の名詞句または命題全体、さらにはその背景をも指示できることを(43)の例文を挙げて示している。(尚、Wales (1996:49)の例文には話し手の違いを示すABは使われていないがここでは便宜上加えている。)

- (43) A: 'Frank, I'm leaving you. I'm going to Dublin.'

Wales (1996:49)

B: 'Why? What is *it*?'

A: '*It's* that big city in Ireland' (Capital Radio, 1992)

Aの「フランク、私はあなたと別れるわ。私、ダブリンに行くことにしたの。」に対して “What is *it*”とBは尋ねている。Bはおそらく「自分と別れてダブリンに行くというのはいったい全体どういうことか」を “it”で伝えたいと思われるが、Aは「ダブリンの町って？」と解釈して「ア

イルランドの大きな町よ」と答えたのだろう。曖昧さが引き起こした解釈の違いである。

この曖昧さは新規スタッフ募集の広告文(44)の“it”にも見られる。まず、この“it”は名詞なのか代名詞なのか、そして“it”が何を指すのかも曖昧である。内部照応なのか外部照応なのかもはっきりしない。この曖昧さの効果を Wales (1996:48)は次のように説明している。ある意味では“it”は実に曖昧であるけれども、新規スタッフ募集の広告というフレームにおいては十分意味を持っている。なぜならば、一方では無制限に必要な資質の意味を残しながらも、そして他方では感じの良さ、受容性の高さを示している、という広告の効果が認められる、と説明している。

(44) You got it! We want it! We want you to work for us

Wales (1996:48)

“it”の曖昧性は Langacker (2007:180)も指摘している。“it”は指示が「曖昧」であり、全体的状況のある局面、または状況全体を表す場合もある。しかし、それが何を意味しているかは単純に決定されないし、時には話し手にもわからない場合があると述べている。例えば、十代の少女がボーイフレンドと映画に行くこと許してもらえなかった場合の不平である “It’s just not fair.” の“it”は何をさすか曖昧であると述べている。そして“it”の非人称性と無制限の曖昧性の働きが “designating the relevant scope of awareness for whatever is at issue.”をもたらすとしている。この点については次節で議論したい。

次に、Ariel (1988) による“accessibility”と Gundel, et al. (1993)による “givenness”^{13/14}という概念から “it”を見る。

Ariel (1988)は指示語の“Accessibility”「接近可能性」を主張しており、この「接近可能性」とは聞き手による指示物へのアクセスを意味し、指示語とは聞き手による指示物への接近・復元をするためのシグナルである、と述べている。(“.....natural languages primarily provide speakers with means to code the ACCESSIBILITY of the referent to the addressee.” (p.68)) 「接近しにくい指示対象は詳しく表現し、逆に接近しやすい指示対象は簡略な表現を選ぶ。」(高橋 2004:29)と説明されている。

Gundel, et al. (1993)も “Universality of the Givenness”を提唱しているが、上位指示語が下位指示語の持つ性質を全て持っている(p.276)という考え方が Ariel とは異なる。

¹³ Langacker (2007:176-177)は人称代名詞の意味は認知文法の基本的概念を用いて記述できると主張しており、同じく Van Hoek (1997)も認知文法の枠組みにおいて代名詞の前方照応を説明している。この二つの論文では、どのように人称代名詞が指示する対象を同定できるかに関して Ariel (1988) による“accessibility”と Gundel, Hedberg, and Zacharski (1993)による “givenness”が有効であると述べている。

¹⁴ Langacker (2007:176-177)の主旨はおおよそ次のようなものである。一人称と二人称は典型的には話し手と聞き手の役割を持っていることから該当する対象者は特定の同定される。一方、三人称(he, she, it, they)は非対話者であり、それゆえ指示対象可能性は広くならざるを得ない。それにもかかわらず、最小限の記述によって三人称代名詞はそれが意図された指示物を抜き出すのに十分であることを示している。例えば、“it”の特定は “the cat”のそれよりもよりスキーマが高く、定冠詞を伴う場合に比べてより高いコンテクストの際立ちが求められる。代名詞はしたがって、Ariel (1988)の “accessibility”スケールまたは Gundel, Hedberg, and Zacharski (1993)の “givenness”スケールにおいても高いところに位置付けられている。

表3 Gundel, et al. (1993:284) Table 1 より英語部分のみ抜粋

	(6) in focus >	(5) Activated >	(4) Familiar >	(3) uniquely identifiable >	(2) referential >	(1) type identifiable
English	it	HE that this this N	that N	the N	indefinite this N	a N

“it”が分類されている(6)“In focus”については、指示物は短期記憶にあるのみならず、現在のattentionの中心にある。ゼロまたはストレスのない代名詞が適切。焦点化されているものは一般に少なくとも先行する発話の話題を少なくとも含み、それと同時に後続する発話の話題であり続けるものを含むと説明している(pp.279-280)。つまり、談話のトピック相当のものを“it”が指示している可能性が高いということになる。

話し手間に共通するトピックを“it”が指示しているというこの説明は、次に示す Thavenius (1983)の研究結果とも一致している。Thavenius(1983:162-167)は、“it”は非常に頻繁にかつ全てのタイプのテキストで用いられる代名詞ではあるが、この代名詞の使用の減少・増加をもたらす何らかの要因があるのかもしれないとして前述の表2のデータの属性を検討している。それらの属性は、Thavenius (1983)では箇条書きにはされていないが、本節では議論の便宜上 (ア)～(ケ)として列挙する。

(ア) The physical setting (p.162)

話し手がそれについて語るモノ、トピックに関する具体的なモノがあれば、“it”の使用頻度は高くなる。しかしトピックに関するモノでなければ、頻度は高くない。

(イ) The context-of-situation (p.162)

話し手間で共有される一般的・文化的・特定の知識があれば“it”の使用頻度は高くなる。

(ウ) The type of activity (pp.162-163) 会話の種類による使用の違いは見られない。

(エ) Topic (p.163)

“The physical setting”でも指摘した通り、トピックは“it”の使用頻度に大きな影響を与える。しかし、もしトピックが“object”や“idea”に関するものでなければ、“it”の使用頻度は他の変数とは無関係に減少するが、他の代名詞(they, he, she)と比べると、トピックの影響度は低い。その理由は“it”の指示領域によるもの。もし指示対象が“object”や“idea”である場合には、トピックに影響を与えるが、事実やプロセスを表すテキストの一部である場合には、トピックは使用頻度に影響を与えない。

(オ) The relationship (pp.163-164)

話し手間の親密性、平等性、知識の共有性が“it”の高い使用頻度に影響を与える。

(カ) The socio-economic life (p.164)、The age (p.165)、Sex (p.165)、Occupation (p.165)

話し手の社会的・経済的背景、年齢、性別、職業などに関しての“it”の使用頻度の違いに

については分析できなかった。

この分析結果も話し手間の共有している知識・トピックの場合に “it” の使用頻度が高い可能性があることを示している。この特徴を **A 定性→トピック性** としてまとめておく。外部照応そして内部照応の “it” 共、**広指示性** を持ちそして **非ダイクシス性** を示していることから話し手の間での共有という特徴を持つトピックに容易に結びつくのではないのだろうか。

“it” の広指示性質そしてトピック性質を明白に示しているのが高橋(2004:26)による下記の会話(45)である。

(45) Steve: Kate, will you marry me? We were made for each other.

Kate: *That's/*It's* quite a line, Steve. You mean fate brought us together?

Steve: *That's/*It's* exactly what I mean. We are the perfect couple.

Kate: We've had a few nice dates. But marriage is a big commitment.

Steve: Sure *it/*that* is. But I'm ready to take the plunge. 高橋(2004:26) 下線は筆者による

この会話の Steve の最後のせりふ “Sure *it* is.” (もちそん、そうさ) の “it” は「結婚」を指示しており、そして「結婚」が意味することは Kate と Steve の特定の二者領域の事柄を超え、不特定の世間一般で共有されている諸知識、つまり結婚に関する百科事典的知識の領域にまで広がっていることが含意されている。そして、この会話のトピックはもちろん結婚である。

ここまで内部照応の “it” に **A 定性** から拡張した **→広指示性**・**→非ダイクシス性** に加えて、そこからさらに広がった **→トピック性** という特質を見てきた。これらの性質を持つ “it” は「聞き手に曖昧に言っても私たちの間なら『わかるでしょ』」という緩和表現へと姿を変えている。一般的に辞書では名詞とされている “it” の一つの用法は性的魅力等のはっきりと口に出したくない事柄を指すと説明されているが、それに留まらない Wales (1996:48) が挙げている例は非常に興味深い。それは、チャールズ皇太子とダイアナ皇太子妃との間の会話では口にしたくない事柄を “it” で指していたという事例である。このイディオム化している表現には指示表現から緩和表現への機能変化が見られ、これは **C Imposter 性** の表れとも考えられるだろう。

It is also, as a result, a useful social device for euphemism on taboo topics such as sex and defecation, or for tact on difficult topics. So in the taped conversation between Prince Charles and Princess Diana just before their official separation was announced (late November 1992), whatever it is that is bothering them is only referred to as it throughout.
Wales (1996:48)

機能の変化を意味する **C Imposter 性** の表れは **B 非人間性** という特質にも見ることができる。Wales (1996:161-162) は “collectives” 集合体を “it” で指示するか “they” で指示するかという問題を扱っている。その選択は当該の指示物に対する話し手の視点によるものであり、集合体を “the group as an entity” と見る場合、つまり、人の姿を薄めた場合は “it” であり(46)、逆に人に焦

点を当てて “the group as composed of several individuals” と見る場合には “they” となる(47)、と説明している。つまり、この場合の “it” は非人間性というより人の姿を薄める特質→弱人間性(defocusing)に変化しているのである。

- (46) *The Government must act. It must make up its mind about priorities... It must insist that local authorities reserve subsidized accommodation.* (SEU, W-15-01; journal, 1964) Wales (1996:164)
- (47) *The Government are prone to spring decisions on delegates: they announced the 70 mph limit to a delegation of chief constables* (SEU, W-08-01; journal, 1966) Wales (1996:162)

本節の考察から、内部照応 “it” にもやはり強い **A 定性** と **B 非人間性** を確認することができた。そして A は定性→トピック性質・イディオム化した緩和表現へと拡張し、B は人間の姿を薄める機能を持つ→弱人間性へと広がりを見せている。そしてイディオム化した緩和表現への変容と集合体指示における 弱人間性を示す “it” の用法に文法的形式と指示的価値のミスマッチ **C Imposter 性** を見ることができるだろう。

表 4 内部照応の “it”

A 定性 A 定性→広指示性(曖昧性を伴う) A 定性→非ダイクシス性 A 定性→トピック性	B 非人間性 B 非人間性→弱人間性 (defocusing)	C Imposter 性質 —文法的形式と指示的価値のミスマッチ
<p>文法的形式と指示的価値のミスマッチによる “it” の変化の可能性：</p> <ul style="list-style-type: none"> ● イディオム化した緩和表現 「チャールズ皇太子とダイアナ皇太子妃との間の会話では口にしたくない事柄を “it” で指示」 Wales (1996:48) A 定性→広指示性・非ダイクシス性・トピック性 から「聞き手に曖昧に言っても私たちの間なら『わかるでしょ』」というイディオム表現。指示表現から緩和表現への機能変化が認められる。 ● 集合体の “it” 指示 (46) <i>The Government must act. It must make up its mind about priorities... It must insist that local authorities reserve subsidized accommodation.</i> Wales (1996:164) ➤ B 非人間性 から人間の姿を薄めた→弱人間性 表現へと機能変化が認められる。(vs. “they” による組織の人々を際立たせる指示) 		

2.3. impersonal *it* 文

下記の(48)～(54)が本節で取り上げる “impersonal *it* 文” (Langacker 2011:179)” であるが、内部は一様ではなく、大きくは2種に分けることができるだろう。

- (48) It rained last night. Langacker (2011:179)
- (49) It is very peaceful without the children around. Langacker (2011:179)

- (50) It's in April that we go to Japan. Langacker (2011:179)
 (51) It's embarrassing when you can't remember someone's name. Langacker (2011:179)
 (52) It is obvious that my novel will never be published. Langacker (2011:179)
 (53) It's hard to wash a cat. Langacker (2011:179)
 (54) It seems that the fire started in the attic. Langacker (2011:179)

まず、(48)～(50)の“it”については、天候・場所・時を叙述する場合に主語位置に置かれる文法的な主語であると説明されることが多い。次に、(51)～(54)の文は生成文法では「it-外置」(it-extraposition)と呼ばれる操作を経て生成されると説明されてきた。「it-外置」の名称は本来の主語である従属名詞節が後置され、その代わり主語の位置にある“it”が「仮主語」の役割を果たしていることによる。例えば、(52)は“That my novel will never be published is obvious.”が元々の主語の形であり、主語位置にある“it”は意味の無い“a dummy subject” (Huddleston & Pullum 2002:1403)であると言われている。

“a dummy subject”という意見に対して Langacker は、これらの“it”には意味があり指示的であるという Bolinger の主張 (ボリンジャー 1981:第4章) を一貫して支持している。下記は“it”についての Langacker の主な意見を挙げたものである。

- Langacker (1991(II):365): Bolinger による“it”の説明-“ambience”または“all-encompassing environment”-はまさに正しい方向を示しており、“the ‘ambient’ sense of *it* designates an abstract setting.”—抽象的な意味における環境状況—と付け加えるのみである。
- Langacker (2000:42): “I would argue, for instance, that the so-called ‘dummy’ or ‘expletive’ *it* represents an abstract, maximally schematic setting.”とダミーや虚辞と言われている“it”は抽象的かつ最大限スキーマ的な状況設定を表している。
- Langacker (2008:390): “It’s raining.”/ “It seems that he lied to us.”の例文に続いて、指示対象が最大限に特定化されていないだけであり、“it”はその後に続く概念内容のベースとなる“scope of awareness” (意識のスコープ) を表している。

上述の Langacker の主張に基づくと(48)～(54)の“it”はスキーマ性の高い状況設定・概念化者の意識のスコープを意味していることになる。この Langacker の主張を **A 定性**・**B 非人間性**・**C Imposter 性**から整理していきたい。

まず、(48)～(50)の表している天候、場所、時はスキーマ性の高い状況設定という説明と一致すると思われる。人間の活動が背景化されたことで前景化される活動の場・状況を“it”が指示することになり、ここには人間の姿を薄める **B 非人間性→弱人間性** の特質が見える。さらに、場や状況は大きな枠組みと考えられ、その枠組み設定という観点から **A 定性**そして **A 定性→広指示性** も関わっていると見られる。しかし、その解釈に内部照応の“it”で見られた曖昧

さは見受けられず、広指示性ではあるが明確な境界性を持っているという特徴がある。ダイクシス性については、“It rained last night here/there.”に見るように “here/there”のいずれも共起できることから、必ずしも話し手志向ということはなく、A 定性→非ダイクシス性という性質が認められる。

次に、(51)～(54)は状況設定を表している文ではない。“it”に後続しているのが何らかの判断を表現していることばであることから概念化者の意識のスコープを表しているという説明は妥当だろう。しかし、その説明だけでは十分とは言えない、ではどのような意識のスコープなのかという問いが残るからである。

この疑問を真剣に問うているのが “impersonal pronoun” という概念を議論している Langacker (2007) である。Langacker (2007:179-180) は、“it” は単に文法機能を果たすもので意味はないという主張がなされているが、文法機能を果たすということは意味が無いことを必然的に意味するものではなく、逆に認知文法においては文法自体も意味を有すると主張している、従って、英語の “impersonal pronouns” は必然的に人称代名詞で持っているのと同じように意味を持っている、と述べている。

そして、“impersonal” とはどのような特定の個人及び個人の集団をも指示しない形を意味すると述べた上で、次の二つの問いを投げかけている。第一の問いが、人称代名詞がどのようにして “impersonal pronoun” として機能しえるのか、そして第二が “impersonal pronouns” はどのような種類の意味を表すのかという問いである。これらの問いに続いて、“it” については次のように説明している。

第一の人称代名詞がどのようにして “impersonal pronoun” として機能しえるのかという問いのおおよその見通しは Langacker (2007:179-180) に述べられており、“A key notion is *delimitation*, a matter of how a linguistic expression projects to the world.” — その鍵は「指示領域」であり、それはどのように言語的表現が世界を投影するかの問題であると主張されている。「指示領域」とは何を意味するのかの説明は次のように続く。

可算名詞としての “place” がある。この “place” は境界のある空間をプロファイルするが、その境界のある空間は非常に狭い場合もありうるし (This would be a good place for the painting)、中間程度の規模の空間 (Hamburg is a nice place to live.)、さらに無限大の空間もある (The universe is a very big place.)。つまり、指示領域は定まっているものではない。

それと同じように複数代名詞、例えば、“we” の境界は定まっているものではなく、“we” の指示幅には制限はない。同じように “you” は話し手以外のどのサイズの聞き手も指し、“they” は話し手と聞き手を除外した集団を指示する。低いレベルの「指示領域」においては、複数代名詞は効果的に “impersonal” であり、同定された個人 (identified individuals) ではなく未分化の集団 (undifferentiated mass) を指示しているのである、と説明されている。

第二の “impersonal pronouns” はどのような種類の意味を表すのかという問いの答えが Langacker (2011:207) にある。“impersonal *it*” 文は一般的概念化者を示す傾向があるというのがそ

の答えである。

I thus propose, as a general characterization, the impersonal *it* profiles the relevant field, i.e. the conceptualizer's scope of awareness for the issue at hand. The conceptualizer may be identified as the speaker or some other specific individual, but – not surprisingly for impersonal constructions – it tends to be a generalized conceptualizer. What constitutes the relevant field varies with purpose and level of experience (e.g. physical, perceptual, social, epistemic), and while *it* evokes the field as an undifferentiated whole, certain facets of it may stand out as being especially relevant or most centrally and directly involved in the relationship profiled by the clause. Such entities offer themselves as specific interpretations for the referent of *it*. I suspect, however, the most schematic value predominates, such that *it* is maximally vague in reference. Imposing no delimitation on the field, in effect its referent is coextensive with it, or at least non-distinct.

Langacker (2011:207) 下線は筆者による

この Langacker の考え方を本論の枠組みに沿い次のように捉えなおすことはできないだろうか。ズームアウトして事柄を見ると、個々の人間の姿は薄れ、そこに見える事柄も一般性を帯びてくる。このようなズームアウトの視点を“*it*”の→広指示性を持つ定性質と人間の姿を薄める→弱人間性がもたらす、このような構図も考えられるのではないだろうか。そして特定の話し手の姿を背景化し一般的概念化者を前面に押し出しているのは→非ダイクシス性の関与もあるのではないだろうか。

(51)~(54)の文は何らかの判断を表している。誰かの判断であるのは確かである。概念化者の立場を明示的に示す方略はいくらでも可能であるのに(55)、あえてそれを言語化しないのが(51)である。とするならば、(51)は概念化者が自分の姿を薄めたいことを示していることになる。

(51) It's embarrassing when you can't remember someone's name. Langacker (2011:179)

(55) I am embarrassed when you can't remember someone's name.

しかしながら、“*impersonal it*”文が“*a generalized conceptualizer*”を示す傾向があることをより具体的な言語事象を示し証明する必要がある。Langacker (2011)では①関連構文との比較、②他の代名詞等との比較、そして③“The control cycle”という基本認知モデルの3方向¹⁵からの分析を重ね合わせて“*it*”の意味の説明を試みているが、さらなる研究が求められるだろう¹⁶。

¹⁵ Langacker (2011): ①に関しては焦点の交替現象を取り上げている。例えば、動作主の焦点・非焦点に関しては能動文と受動文及び他動詞文と自動詞文、参加者の焦点・非焦点に関しては場所主語文(e.g. “The garden is swarming with bees.”)等が挙げられている。②については、人称代名詞 *we*, *you*, *they* が特定の個人から不特定の人々を指示できる幅を持っていること、指示詞の指示の曖昧性等を示している。③このモデル(p.198)は Baseline > Potential > Action > Result で構成されており actor がターゲットをどのように認識し対応するかを表しているものである。静的な状態である Baseline では、actor はその領域を集合的に構成する “an array of entities” をコントロールしている。第二フェーズである Potential では、あるターゲットが “scope of potential interaction” (actor による潜在的相互作用の範囲) である “actor's field” に入る。この状態は緊張を生じさせる。なぜならば actor はそのターゲットをなんらかの方法で処理しなければならないからである。第三フェーズの Action における典型的な処理方法は、そのターゲットを actor のコントロール内にいれることである。そのアクションの結果として、最後の第四のフェーズ Result では再びより静的な状態に戻る。

¹⁶ 湯本(2013)でも “*a generalized conceptualizer*” の妥当性を “*Impersonal It*” 文の二種類の語彙的特徴を考察することから示すことを試みた。第一の特徴は、不定詞を目的語にとり受動態で使われる “*decide*, *hope*, *intend*” 等の動詞で、これらの動詞は基本文には不可で *Impersonal It* 文のみ可能である (e.g. “*To short-list

このように整理すると、前節でも取り上げた“it”の特質である **A 定性**そして **B 非人間性**は抽象度を高めた姿で impersonal it 文にも見ることができると言えるのかもしれない。そしてここでの“it”は事柄の前景・背景機能へと転換しており、そこに **C Imposter 性**を見ることができ
る可能性がある。

表 5 impersonal it 文

A 定性 A 定性→広指示性（明確な境界性を伴う） A 定性→非ダイクシス性	B 非人間性 B 非人間性→弱人間性（defocusing）	C Imposter 性 —文法的形式と指示的価値のミスマッチ
文法的形式と指示的価値のミスマッチによる“it”の変化の可能性： <ul style="list-style-type: none"> ● 状況設定・一般的概念化者の表示 <div data-bbox="234 633 1210 664">(48) It rained last night. Langacker (2011:179)</div> <div data-bbox="234 672 1210 703">(51) It's embarrassing when you can't remember someone's name. Langacker (2011:179)</div> <div data-bbox="234 710 1210 880"> ➤ ズームアウトして事柄を見ることにより、個々の人間の姿は薄れ、事柄に焦点が当たっている、“it”の広指示性と人間の姿を薄める弱人間性の影響が考えられる。ここでの“it”は指示するという機能から、事柄の捉え方の機能へと変化している。(48)では場面設定が前景化され (51)では事柄全体が前景化され、いずれにおいても話し手は背景化されている。 </div> 		

2. 4. It分裂文

It 分裂文¹⁷は、Langacker (2011)が There 構文とともに今後の研究課題として挙げている構文である。Langacker (2011:213-214)は “It's in April that we go to Japan.”を挙げて、次のような見方を示している。“Here I suspect that *it* is more specific than just the relevant scope of awareness. I speculate that *it* designates an abstract ‘path of selection’, whereby one option is chosen from range of conceivable alternatives.” 一単に意識のスコープを指示するというより、より特定の働きを示しているのではないか、“it”は抽象的な選択の経路を表し、それによって可能な選択肢の中から一つが選択されるのではないかという意見である。

“it”と選択経路との関係は非常に興味深いアプローチではあるが、本節では前節と同じく、“it”の外部照応の特質である **A 定性**・**B 非人間性**・**C Imposter 性**から It 分裂文の特徴/議論点を見ていくことによりこの構文と“it”との関係を考えていく。まず、この構文の分類そして未解決とされている興味深い点/議論点を示す。そして、これらの興味深い点の中で、“it”が何らかの関与をしていると考えられる点を考察していくという方法をとる。

分類について、Prince (1978)は It 分裂文の that-clause の内容の新旧情報に着目し、It 分裂文に

three of the candidates was decided.”, “It was decided to short-list three of the candidates.”)。第二の語彙的特徴、節主語文には不可で Impersonal It 文にのみ生起可能な“seem”等の動詞(e.g. “*That everything is fine seems.”, “It seems that everything is fine.”)を取り上げた。しかしながら、さらなる検証が必要なのは言うまでもない。

¹⁷ Prince (1978:896 他)に基づき、“It”で導かれる部分を “It-cleft”、“that”で導かれる部分を “that-clause”と呼ぶこととする。

は二種があると主張している。Prince(1978)の分類の一つ目は、It-cleft の内容が新情報かつ多くの場合対比的情報であり、that-clause¹⁸に既知または旧情報、前提情報が置かれている分裂文(56)である。Prince (1978:896)は “stressed focus IT-clefts”と呼んでいる。It-cleft の新情報の“just the covers”に強いストレスが置かれることからこのような名称が与えられている。

- (56) Stressed focus It-clefts : ...So I learned to sew books. They're really good books. It's just the covers that are rotten. Prince (1978:896) 下線 (=新情報) は筆者による

二つ目は、that-clause に新情報がある It 分裂文で、Prince (1978:898-903)は “informative-presupposition IT-clefts”と呼んでいる。前出の(56)stressed focus It 分裂文では前提情報が置かれているのは that-clause 部分であったが、このタイプの分裂文では that-clause の情報は既知ではなく、新情報であり聞き手にとり知識を与えるものであることから、“informative-presupposition”という呼び方となっている。このタイプの分裂文の存在が Prince (1978)の主張の一つである。下記の(57)と(58)がこのタイプである。

- (57) Informative-presupposition It-clefts : (The leaders of the militant homophile movement in America generally have been young people.) It was they who fought back during a violent police raid on a Greenwich Village bar in 1969, an incident from which many gays date the birth of the modern crusade for homosexual rights.

Prince (1978:898) 括弧及び下線 (=新情報) の付加は筆者による

- (58) Informative-presupposition It-clefts/Discontinuous clefts : It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. (On September 25, 1926, in a somewhat shocking move for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one.)

Prince (1978:898) 括弧及び下線 (=新情報) の付加は筆者による

この(57)と(58)の informative-presupposition It 分裂文には次の違いがある。(57)の場合は It-cleft で導かれた内容 “they”は既知情報であるが、(58)の場合は、that-clause のみならず、It-cleft の内容も新情報であり、It 分裂文全てが聞き手にとり初めて聞く情報で構成されている。(58)は談話冒頭に用いられることが多く、このタイプを Declerck (1984)は “discontinuous clefts”と呼び “discourse opener”の働きがあると述べている¹⁹。

¹⁸ Prince (1978:896)は、“In the stressed-focus *it*-cleft, the *that* clause represents known or old information, which is not marked as assumed to be in the hearer's consciousness and which is not the theme.”と述べている。

¹⁹ Prince (1978:904)は WH 分裂文と It 分裂文の違いを分析しており、結論として次のように述べている—“WH-clefts mark the information in the WH-clause as assumed/assumable to be in the hearer's consciousness or GIVEN.*It*-clefts, however, are far more heterogeneous, but all types mark the information in *that* clause as a known fact – or simply KNOWN.” この Prince (1978)の主張に対する反論が

It 分裂文が持つ興味深い点・議論点について Patten(2012:1-5)が次のようにまとめている。Patten は箇条書きにはしていないが本節では後の議論の便宜上、(ア)～(ケ)と列挙する。

統語的観点からの問題点 (ア)～(イ)

(ア) It 分裂文の統語的配置が不思議である。that-clause はあたかも制限節であるかのようだが、通常は制限節で修飾されない“full noun phrases”である例えば“Frank”に that-clause が後続している。この that-clause と “Frank”との関係をどのように説明すべきか(p.1)。

(59) [It] [was] [Frank] [that complained] Patten (2012:1)

(イ) 文頭の“it”はダミー主語なのか。もしそうならば、何のためのものか。また“it”はこの文の他の要素とどのような関係を持っているのか(p.1)。

意味的・語用論的・談話機能の問題点 (ウ)～(ケ)

(ウ) 分裂文のどの要素が構文の意味に寄与しているのか：その第一の問題は焦点である(pp.1-2)。

It 分裂文は焦点化構文(a focusing construction)であり、第一義の情報内容は be に後続する部分に置かれ、そこに第一ストレスが置かれる。焦点装置としてなぜこのような統語的配置が選択されるのだろうか。

(60) It was FRANK that complained. Patten (2012:2)

(エ) 分裂文のどの要素が構文の意味に寄与しているのか：その第二の問題は前提についてである(p.2)。(61)では「誰かが不平を言った」という文尾節は主張されておらず前提となっている。この前提という語用論的意味はどこから来るのか。

(61) It wasn't Frank that complained. Patten (2012:2)

(オ) 分裂文のどの要素が構文の意味に寄与しているのか：その第三の問題は It 分裂文の持つ“value-variable”（値と変数）関係についてである(p.2)。(62)において FRANK は文尾節 “x complained”の変数の値となる。とするならば “be”が It 分裂文において “a specificational meaning”（特定の意味）を持つということになるのか。もしそうではないのならば、この特定の意味はどこから来るのか。

(62) [It] [was] [Frank] [that complained] Patten (2012:1)

(カ) 上記の疑問を考えるにおいて、It 分裂文と他の構文との関係をどのように捉えるべきか(p.2-3)。この点について、大きく分けると二つの異なった先行研究がある。第一が It 分裂文は単純な主語—述語文(Frank complained.)との関係を持っている。この見方の適切性は It 分裂文の持つ真理条件が主語—述語文と一致している点にあり、そこから見ると It 分裂文

Declerck (1984) であり、WH 分裂文と It 分裂文は同じ3種の下位分類(Contrastive clefts, Unstressed-anaphoric-focus clefts, Discontinuous clefts)が可能であり、両者の基本的な意味と機能は等価である、分裂文タイプの選択にはトピック等の語用論的要因が関わっているだけであると主張している。3種の It 分裂文の一つが “Discontinuous clefts”であり、この特徴については “the focus NP has a greater potential for being a persistent topic.”(p.267)と、焦点化された名詞句は継続性を持つトピックとなる可能性が高いと述べている。

は第一義として焦点を統語的にマークする手法ということになる。第二が、他の特定の連辞文(The one that complained was Frank.)とかかわりがある。この見方の利点は、It 分裂文が指定的意味を持っていることを反映していることにある。

- (キ) (63)で “be”に後続しているのは前置詞句である。このタイプの It 分裂文と名詞句が “be”に後続している It 分裂文とを同等と見なすべきか、それとも他の構文と見なすべきか(p.3)。

(63) *It's in October that he's leaving.* Patten (2012:3)

- (ク) (64)の文の文尾節で述べられている情報 “someone once said ‘Laws are silent at times of war’” は前出の談話で述べられていることではなく、講義冒頭の発話である。従って、この情報が既知(またはよく知られている)という必然はない。(にも関わらず既知情報として聞き手に受け入れられるのはなぜか。—この部分は筆者の付記)

(64) (Start of lecture) Patten (2012:3)

It was Cicero who once said, “Laws are silent at times of war.”

- (ケ) It 分裂文は通常指定性を持つが、(65)は叙述性を示しており、(66)とパラフレーズできる。この(65)は指定的 It 分裂文と関係を持っているのか否か。さらに外置文とは何らかの関係を持っているのか。表面上、外置文(68)と It 分裂文(67)との違いは It 分裂文(67)が文尾節に空所を持っているだけである(p.4)。

(65) *It is a long road that has no turning* Patten (2012:4)

(66) *The road that has no turning is a long one* Patten (2012:4)

(67) *It was the Colonel [that ____ survived]* Patten (2012:4)

(68) *It is a miracle [that he survived]* Patten (2012:4)

(ア) ～ (ケ) のいずれの疑問にも定説と言われる説明は管見には無いようである。そして “it”自体の意味・機能を直接問うている(イ)のみならず疑問の多くは “it”に深く関係していると思われるが、特に、(エ)、(オ)、(キ)、(ク)そして(ケ)はそうであると考え。順番に見ていく。

(エ)の前提の問題はトピックから考えていくことができるのではないだろうか。なぜならば、前提とトピックには密接な関係がある。会話の中でトピックとして語られている事柄についての情報はその語られているプロセスの中で次から次へと前提へとダイナミックに変化すると考えられるからだ(山梨 2004:35)。

そして、トピックと分裂文にも密接な関係があると言われている。例えば、Gundel (1988)は分裂文をトピック・コメント構造から説明している。そして安井(1978:87-89)は、分裂文の焦点に生じているのはトピックであり、その文のテーマ、それも特別に強調され目立つように仕組まれたテーマであると述べている。そこから(ウ)でも指摘されているように It 分裂文は焦点化構文とも言われている。このトピックを指示する傾向があるというのは内部照応の “it”にも見られた性質 A 定性→トピック性である。そこから “it”と前提との繋がりが考えられる。

(オ) で指摘されているように、It 分裂文は、value-variable (値と変数) 関係を示しており、値を特定化/指定する意味 —specificational meaning (identifying meaning)—を持っているという捉え方がある(Declerck 1988:183)。

値と変数関係が顕著に出て、かつ that-clause が省略されることが多いと言われている It 分裂文は(56)stressed focus It 分裂文である。(57)のタイプの分裂文も値と変数関係は表すが、It-cleft のみでは用いられないという違いがある。) (56)は that-clause が省略された場合には(69)のような照応 “it”と同等の形式となる。Bolinger (1972:29)は(70-71)の例を挙げて、分裂文の “it”は真の代名詞であるとして同じ “it”が独立文にも生起すると述べている。

(56) Stressed focus It-clefts : ...So I learned to sew books. They're really good books. It's just the covers that are rotten. Prince (1978:896)下線 (=新情報) は筆者による

(69) It's just the covers.

(70) It was yesterday that he came. He came; it was yesterday. Bolinger (1972:29)

(71) It was with a pen that he wrote it. He wrote it; it was with a pen. Bolinger (1972:29)

この特定化・指定化する機能は外部・内部照応の “it”の持つ「定性」と通じるものがある。これまで見てきた外部・内部照応の「定性」は定指示幅が多様であり、境界性を強く示すタイプと曖昧性を見せる2タイプがあった。impersonal it 文においてはその定性には明確な境界性が見られた。そして It 分裂文の場合は“exhaustiveness”(総記性) (Patten 2012:82)そして “contrast” (対比性) (Patten 2012:85)を持つという非常に特定の指定性を持っている。そこから分裂文の場合の定性は明確な境界性を持っていることになる。従って、It 分裂文の It の定性は、impersonal it 文の定性を引き継いでいるとも言え、又、外部照応の “it”の最も基本的 **A 定性**を引き継いでいるとも言うことができる。

上述の説明は “it”自体に狭指示性を伴う定性があるとする立場であるが、この見方に対して、It 分裂文が“it”に加え、“that”も持っていることに注目する、つまり、“it”と “that”の両方の働きによって指定的定性が現れるという考え方も有力である。この考え方を下記に説明する。

Gundel, Hedberg & Zacharski (1993) の “The Givenness Hierarchy”に基づく、“in focus”の“it”は「指示物は短期記憶にあるのみならず、現在の center of attention」と指示幅は広い。その指示幅の広さを、“activated”の “that”で狭めている。“that”は「指示物は現在の短期記憶の中にあるもの。Activated representations は長期記憶からも引き出されることもある。また、それらは immediate linguistic or extralinguistic context から引き出せる。」というものである。この “it”と “that”が語用論的に一つの定記述機能を持つ一つの単位を成しているという考え方が “discontinuous constituent analysis”の根底にある。

“discontinuous constituent analysis”の手法を取っている Patten(2012:11)は次のように述べている —“I analyse the sentence-final clause as restrictive relative, modifying the initial *it*. *it* and relative

clause together operate like a discontinuous definite description.”。that-clause と It は制限関係節を成しており、制限関係節であることから定性が認められる。“it”によってこの定性が discontinuous NP にもたらされており、それは“it”が他の人称代名詞と同じように定性を持っていることによると説明している。そして It と that-clause が共に “a definite NP predicate”として機能していると主張している。つまり、広から狭へというズームインの見え方、広指示性を持つ“it”と狭指示性を持つ “that”が一つの単位を成すという考え方である。

上述の通り、“it”の指示幅についての二種の見方を示したが、いずれにしても値の指定と “it”の定性には関係が考えられる。

(キ)の時を表す前置詞句を持つ It 分裂文は、Declerck (1984)が discontinuous clefts と呼ぶタイプの It 分裂文(58)のことである。このタイプはまさに impersonal it 文を強く想起させ、“it”が状況環境の設定を担っていると解釈できるだろう。とするならば、人間の活動ではなく、人間が活動をする場・状況を指示するということで **B 非人間性**の特質、さらに、場や状況は大きな枠組みであり、境界性を伴う **A 定性→広指示性**が影響していると考えられる。

(ク)の「既知性」の問題とは (58) discontinuous clefts の特徴の一つと言われている “a known-fact effect” (既成事実効果)そして “a responsibility-weakening function” (個人的責任回避機能) (Prince 1978:898-900)のことである。

既成事実効果とは、that-clause で述べられている内容が初出であるにも関わらず他の人には既に知られた事実であり聞き手のみ知らなかった情報として提示される効果 —“as a known fact, unknown only to the readership”(Prince 1978:898)、“to mark a piece of information as fact, known to some people although not yet known to the intended hearer.” (Prince 1978:899-900)— のことである。そして、その情報に対する話し手の「個人的責任回避機能」 —“a responsibility-weakening function” (“reducing the speaker’s responsibility” Prince 1978:900)— をも持っていると言われている²⁰。

(ク)の例文は談話冒頭に使われる It 分裂文であり、この場合には who 節で表現されている陳述は聞き手に知られた事実ではないだろうし、講師も聞き手がこのことを知っているとは思ってはいないであろう。それにも関わらず、発話者である講師は聞き手が前提に順応する意志があると期待しているのである。

Prince (1978)以降、これらに類似の働きを認めている研究者は少なくない (Borkin 1984:124、Collins 1991:167、Delin & Oberlander 1995:474/492-493、Lambrecht 1994:71/2001:484-5、Huddleston & Pullum 2002:1424)。

²⁰ このような既成事実効果と個人的責任回避機能は informative-presupposition It 分裂文に見られると言われている。informative-presupposition It 分裂文が用いられる状況について Prince (1978:900) は、“Thus they [IP It 分裂文を指す] are frequent in historical narrative, or wherever the speaker does not wish to take personal responsibility for the truth or originality of the statement being made.” と述べている。つまり、informative-presupposition It 分裂文は、歴史的物語や、話し手がその陳述についての真偽や創意性に個人的責任を負いたくない場合に多く使われている。そして、Prince (1978:898-900)は、informative-presupposition It 分裂文は話し手の責任を弱める “hedges” の働きを持つことから説得を試みる談話に適しているとしている。

しかし、このような“a known-fact effect”（既成事実効果）そして “a responsibility-weakening function”（個人的責任回避機能）をどの要素がもたらすのかは議論の対象となっている²¹。

この「既成事実」・「個人的責任回避」効果に関しても、Langacker の “a generalized conceptualizer” は有意義な説明方法ではないだろうかと湯本(2014)で提案した。Langacker (2011:203)は “a generalized conceptualizer” としての話し手の立場について次のように説明している。

(34)a. *I* am certain that formalists will someday discover the meaningfulness of grammar.

b. *It* is certain that formalists will someday discover the meaningfulness of grammar.

Choosing *I* as subject highlights the speaker's own responsibility for the epistemic judgment. By using impersonal *it*, the speaker avoids the spotlight, shifting responsibility to unspecified circumstances on the basis of which *any* conceptualizer would arrive at the same assessment. While it is true that the speaker retains ultimate responsibility, and could not plausibly deny the validity of the proposition said to be *certain*, the speaker's role is nonetheless defocused. The speaker remains offstage, only by implication subscribing to the view claimed to be evident to anyone who might consider the matter.

Langacker (2011:203)

“it”は一般的概念化者を含意し、そうすることにより、個人的責任の回避という効果が生まれる。It 分裂文にもその効果が認められるのではないだろうか。「話し手のみならず『他の皆も』それを事実と見なしており、話し手はその一人である」として事柄が聞き手に示されれば、discontinuous Clefts の持つ「既成事実効果」のみならず「個人的責任回避機能」をも説明できることになる。もしこの考え方が適切であれば、**B 非人間性→弱人間性**そして **A 定性→非ダイクシス性**が個人の姿を薄めることに寄与していると考えられる。

最後に、(ケ)の外置文、つまり impersonal it 文と It 分裂文の関係についてであるが、informative-presupposition It 分裂文の起源をコーパス調査から分析している Ball(1994)は、次のような見解を示している。

²¹ 主なアプローチは次の二つである。

第一は、慣習化と “that” の効果によるものと主張している Lambrecht (1994:71)である。前提を必要とする stressed focus It 分裂文の形式を用いて共有されていない情報を提示することにより、その表現自体を前提と解釈するように仕向け、また聞き手もそのように捉えていると説明している。そして stressed focus It 分裂文と informative-presupposition It 分裂文には関連性があり、その関連性をもたらすものは、that-clause によって “grammatically marked” されている “factual and non-asserted” であるとしている。

第二は、It 分裂文の定性質からもたらされるとする見方で、“discontinuous constituent analysis” がこの分析にも用いられている。さらに、“it” を “the” の異形態と捉える考え方もある。

- Hedberg (2000) は主要部 “it” は離れている “wh-句” (complementizer phrase)を補部にとる定名詞句(determiner phrase)であると仮定し、“the subject pronoun in a cleft sentence together with the cleft clause is shown to function pragmatically as a discontinuous definite description.” (p.891)と述べている。そして、“*It* functions as an allomorph of the, and cleft clauses pattern like the nominal content of definite descriptions” (p.903)と述べており、分裂文の “it” は定冠詞 “the” の異形態であると考えている。Gundel et al. (1993)の “Givenness Hierarchy” に基づいて説明しており、“it” はつまり “the” の異形態であることから “the” = “uniquely identifiable” — 聞き手はその名詞のみで話者が意図する指示物を唯一同定することができるものを指示していることになる。従って、同定できる条件には “previous familiarity” (談話前出による既知性) によるという必然性はないということになる。
- Gundel, Hedberg & Zacharski (2001:4 節) も Hedberg (2000)と同様の見解を示しており、It 分裂文の定性質は “uniquely identifiable” であると考えている。様々な先行研究を分析した結果、that-clause の内容の多くが 聞き手にとり既知情報ではなく、定冠詞と同じ “uniquely identifiable” と解釈すべきであると述べている。

Informative-presupposition It 分裂文は後期中期英語に始まり、“the convergence of several cleft and cleft-like copular constructions” —いくつかの分裂文そして分裂文に類似したコピュラ文の収斂から現れたと主張している。この主張は次の分析結果に基づくものである(p.623)。後期中期英語の 14 世紀に最初の informative-presupposition It 分裂文が認められ、その文の焦点部分は副詞句/前置詞句である。この informative-presupposition It 分裂文は二つの構文の “merger” であると考えられる。二つの構文とは “an old copular impersonal construction” と名詞句を焦点部分に持つ It 分裂文である。15 世紀には焦点部分に名詞句を持つ informative-presupposition It 分裂文が現れているが、これを old stressed focus It 分裂文からの発達と見る証拠はなく、むしろ、“the old inverted pseudo-cleft” と “the new AdvP/PP-focus it-cleft” の影響によるものであると見ている。なぜならば、古期英語時代から “the old inverted pseudo-cleft” は補部に新情報を許していたからである。このような発達の経緯から、Ball(1994)は informative-presupposition It 分裂文は一つの源から発達したものではなく、類似構文である疑似分裂文、そして非人称構文から発達したものであると考えている。

従って、もし Ball(1994)の見解が妥当であるとする、It 分裂文の発達には非人称構文、つまり impersonal it 文も関わっている可能性があり、両構文の関連性が推測される。

It 分裂文の持つ興味深い点のいくつかを “it” との関わり合いで考察した結果が表 6 である。このように整理すると It 分裂文の内部にも “it” の特質という観点からの連続体を見ることができのではないだろうか。

表 6 It 分裂文

A 定性 (= 指定性定性) A 定性→広指示性 (境界性を伴う) A 定性→非ダイクシス性 A 定性→トピック性	B 非人間性 B 非人間性→弱人間性 (defocusing)	C Imposter 性 — 文法的形式と指示的価値のミスマッチ
<p>文法的形式と指示的価値のミスマッチによる “it” の変化の可能性：</p> <p>(56) <u>Stressed focus It 分裂文</u></p> <p>...So I learned to sew books. They're really good books. It's just the covers that are rotten.</p> <p>(エ) 前提とトピックの関係：A 定性→トピック性の影響。</p> <p>(オ) 値と変数の関係からもたらされる指定性を持つ定性(that 以下を省略可能)：① “it” の基本的 A 定性による指定的定性の影響。また、② “it” の A 定性→広指示性・トピック性+ “that” の狭指示性の影響。</p> <p>(57) <u>Informative-presupposition It-clefts</u></p> <p>(The leaders of the militant homophile movement in America generally have been young people.) It was they who fought back during a violent police raid on a Greenwich Village bar in 1969, an incident from which many gays date the birth of the modern crusade for homosexual rights.</p> <p>● このタイプの分裂文も Stressed focus It 分裂文と同様の特徴 (エ)・(オ) は持っているが、新情報の “who” 以下を省略することはないという違いがあるため、外部照応・内部照応 “it” の特質の表れは若干弱いと思われる。さらに、この分裂文の発達に impersonal it 文の</p>		

関与が考えられるという点では discontinuous タイプとの類似も見られ、“it”との関連に関して、(55)と(57)の中間に属するのではないと思われる。

(58) Informative-presupposition It-clefts/Discontinuous It 分裂文

It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. (On September 25, 1926, in a somewhat shocking move for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one.)

- (キ) 前置詞句が “it” で導かれているタイプの It 分裂文：“it” によるスキーマ性の高い状況環境の設定—impersonal it 文に見られる特質に類似。
- (ク) 既成事実効果＋個人的責任回避機能：一般的概念化者の存在を含意—impersonal it 文に見られる特質に類似。
- (ケ) Informative-presupposition It 分裂文の発達に impersonal it 文も関わっている可能性がある。

3. 結論

本論の目的は、外部照応、内部照応、impersonal it 文そして It 分裂文の “it” を連続体と考える根拠は何か、言い換えると、「何が」そして「どのように」これらの “it” の用法に連続しているのかを明らかにする為の一つの「試み」を示すことであった。

“it” は、内容をもっている名詞用法、指さしと共に使用できる外部照応、談話や文内の事柄や要素を指示することができる内部照応、そして文法機能としての働きが強い構文内での用法と、その働きは多岐にわたっている。音形の小さな “it” であるが、その語彙項目から文法機能までの豊かな働きは日常の英語使用に頻繁に見ることができる。しかし、この “it” をどのように扱うのかは言語理論によって大きく異なる。文法機能の高い “it” には意味が無いとする見方がある。それに対して、認知文法においては全てが意味と音形のペアを成すシグナルであり、従って、文法機能が高いということのみで “it” には意味が無いという説明を認めていない。語彙と文法はグラデーションを示す連続体という主張は認知文法の根幹にある考え方である。この考えの妥当性を示すのも本論が目指したものであった。

CG's most fundamental claim is that grammar is **symbolic** in nature. What does this mean, exactly? Let us first define a **symbol** as the pairing between a semantic structure and a phonological structure, such that one is able to evoke the other. Grammar, of course, is concerned with how such elements combine to form complex expressions. The basic tenet of CG is that nothing beyond symbolic structures need be invoked for the proper characterization of complex expressions and the patterns they instantiate. More specifically: **lexicon and grammar from a gradation consisting solely in assemblies of symbolic structures.** Langacker (2008:5)

その方法の一つとして、代名詞 “it” としての最も具体的指示性を示す外部照応の “it” の特質を抽出し、その特質から内部照応、impersonal it 文、It 分裂文の特徴を考察する方策をとった。

外部照応の “it” は第一に **A 定性** を持っている。この定性は狭い範囲の指示のみならず **広指示性** をも示すことができるものであり、この指示性の幅は 2.3 節で紹介した Langacker (2007:179-180) の主張 “delimitation” (“A key notion is *delimitation*, a matter of how a linguistic expression projects to the world.”) と重なるものである。のみならず、この定性は **非ダイクシス性** をも示しており、

そこから “it” は話し手または聞き手、第三者のいずれにも、また過去・現在のいずれにも志向しない中立的な視点を示すことができる。これは文法的機能への拡張に大きな働きを持つ特質ではないかと考える。さらに、**B 非人間性** という特質も示していることを確認した。

そして人称代名詞全般が持っている「文法的形式と指示的価値のミスマッチ」が “it” にも顕著に見られることを示した： ① “it” が示す文法的形式、つまり物指示という本来の働きと指示対象の実体価値が人であるというずれ、② 本来は「定」であることが明白な物を指示する働きを持つ “it” が未だ話し相手として「定められていない何者か」という不定者を指示するというずれである。この特徴は、従来、社会的ダイクシスの方策として捉えられていたが、本論では本質的な特質— “it” の働きを変える機能的性質—と見え、3つ目の特質 **C Imposter 性** として挙げた。

分析の結果は次の通りである。

- 内部照応：内部照応の “it” の分析では、その多くに定性と非人間性の特質をストレートに見出すものであったが、A 定性が **トピック性**、B 非人間性が人間の姿を薄める (**defocusing**) **弱人間性** へと広がりを見せている。加えて、この用法における A 定性→広指示性は曖昧性を伴うものである。さらに緩和機能を示す用法もある。
- impersonal it 文：“it” の働きは抽象度が高くなり、広指示性と非ダイクシス性を持つ A 定性と B 非人間性→弱人間性は事柄の前景化・背景化機能へと姿を変えている。その一つが、記述する事柄自体を背景化し、状況設定が前景化される表現である。もう一つは話し手の姿が背景化され、そのことにより前景化されるのが一般性を帯びた事柄であり、一般化された概念化者の姿である。ズームアウトして事柄を見ることにより、個々の人間の姿は薄れ、事柄自体も一般性を帯びてくる、という事柄の捉え方ではないかと考える。ここでの A 定性は曖昧性のない境界性を伴うものとなっているのも特徴である。
- It 分裂文：It 分裂文では様相はさらに複雑である。“it” に加え、“that” という指示性と文法性の両方を持つ要素が加わっているからである。さらに、定着をしている成熟した構文であることから、構文総体の意味は各々の要素の和ではないことが考えられる。従って、“it” の働きのみを明確に抽出することはできないだろう。しかし、“it” の A 定性・B 非人間性及びそれらの拡張性質は It 分裂文の様々な特徴—前提・値/変数・前置詞句焦点構文・既成事実効果・歴史的成立背景に見ることができた。そして It 分裂文の中でも、stressed focus It 分裂文は外部・内部照応の “it” の特質、discontinuous It 分裂文は impersonal it 文の特質を受け継いでいると考えられ、分裂文内にも連続体がある可能性を示している。ここでの A 定性は曖昧性のない境界性を伴うものとなっているのも特徴である。

外部照応 “it” が持つ広指示性そして非ダイクシス性を持つ「定性」そして弱人間性への拡張を持つ「非人間性」は非常にスキーマ性の高い特質である。さらに、それらの一般性の高い特質

に別の機能を与える「Imposter 性」—「文法的形式と指示的価値のミスマッチ」性質—を“it”は持っている。これらの特質が “it”の指示的意味から文法的機能への連続体の形成を可能にしている、本論ではこのような見方を一つの試みとして提示したい。

参考文献

- Ariel, Mira (1988) “Referring and accessibility.” *Journal of Linguistics* 24. pp.65-87.
- Ball, Catherine N. (1994) “The origins of the informative-presupposition *it*-cleft.” *Journal of Pragmatics* 22. pp.603-628.
- Bolinger, Dwight (1972) *That's that*. The Hague/Paris: Mouton.
- Borkin, Ann (1984) *Problems in Form and Function*. New Jersey: Alex Publishing Corporation.
- ボリンジャー, D. (1981) 中右実 (訳) 『意味と形』東京：こびあん書房.
- Collins, Chris & Paul M. Postal (2012) *Imposters: A Study of Pronominal Agreement*. Cambridge/Massachusetts: The MIT Press.
- Collins, Peter C. (1991) *Cleft and Pseudo-cleft Constructions in English*. London/New York: Routledge.
- Declerck, Renaat (1984) “The pragmatics of *IT*-clefts and *WH*-clefts.” *Lingua* 64. North-Holland: Elsevier Science Publishers B.V. pp.251-289.
- Delin, Judy & Jon Oberlander (1995) “Syntactic constraints on discourse structure: the case of *it*-clefts.” *Linguistics* 33. pp.465-500.
- Fillmore, Charles J. (1977) *Lectures on Deixis*. CSLI Publications.
- Gardell, Laure & Sandrine Sorlin (2015) “Chapter 1 Personal pronouns – An exposition” In Gardelle, Laure & Sandrine Sorlin (eds.) *The Pragmatics of Personal Pronouns*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.1-23.
- Gundel, Jeanette K. (1988) “Universals of topic-comment structure.” In Hammond, Moravcsik & Wirth (eds.) *Studies in Syntactic Typology*. Amsterdam/Philadelphia: J. Benjamins. pp. 209-239.
- Gundel, Jeanette, K. Nancy Hedberg & Ron Zacharski (1993) “Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse.” *Language* Volume 69, Number 2. pp. 274-307.
- Gundel, Jeanette, K., N. Hedberg, & R. Zacharski (2001) “Definite descriptions and cognitive status in English: why accommodation is unnecessary.” *English Language and Linguistics* 5.2: Cambridge University Press. pp.273-295.
- Hedberg, Nancy (2000) “The Referential Status of Clefts.” *Language*, Volume 76, Number 5. pp.891-920.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 今井邦彦 (2015) 『言語理論としての語用論 入門から総論まで』東京：開拓社.
- Kamio, Akio & Margaret Thomas (1998) “Some Referential Properties of English *IT* and *That*.” In Akio Kamio & Ken-ichi Takami (eds.) *Function and Structure in honor of Susumu Kuno*. John Benjamins. Amsterdam/Philadelphia pp. 289-315.

- 『研究社 新英和大辞典』東京：研究社。
- 『研究社 リーダーズプラス』東京：研究社。
- 『研究社 ルミナス英和辞典』東京：研究社。
- Kitagawa, Chisato & Adrienne Lehrer (1990) "Impersonal Uses of Personal Pronouns." *Journal of Pragmatics* 14: North-Holland. pp.739-759.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud (2001) "A framework for the analysis of cleft constructions." *Linguistics* 39-3. pp.463-516.
- Langacker, R.W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* Volume I /II. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (2007) "Constructing the meanings of personal pronouns." In Radden Günter, Klaus-Michael Köpcke, Thomas Berg and Peter Siemund (eds.) *Aspects of Meaning Construction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.171-187.
- Langacker, R.W. (2008) *Cognitive Grammar A Basic Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Langacker, R.W. (2000) *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R.W. (2011) "On the subject of impersonals." In: Brdar, Mario, Stefan Th. Gries and Milena Žic Fuchs (eds.) *Cognitive Linguistics Convergence and Expansion*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.179-217.
- 松本克己 (2010) 『世界言語の人称代名詞とその系譜—人類言語史 5 万年の足跡—』東京：三省堂。
- 新村朋美 (2006) 「日本語と英語の空間認識の違い」『月刊言語 2006 年 5 月』.pp.35-43.
- Mühlhäusler, Peter & Rom Harré (1990) *Pronouns and People: The Linguistic Construction of Social and Personal Identity*. Oxford/Cambridge: Basil Blackwell.
- 奥津文夫 (2000) 『日英ことわざ比較文化』東京：大修館書店。
- Patten, Amanda L. (2012) *The English It-Cleft*. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- ピーターセン、マーク (1990) 『続 日本人の英語』東京：岩波書店。
- Prince, Ellen F. (1978) "A Comparison of WH-Clefts and IT-Clefts in Discourse." *Language*, Volume 54, Number 4. pp.883-906.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- セイン、デイビッド (2011) 『ネイティブが教える英語の語法とライティング』東京：研究社。
- 鈴木孝夫 (1996) 『教養としての言語学』東京：岩波新書。
- 高橋英光 (2004) 「第 2 章 指示語の理解：英語の it と that」大堀壽夫（編）『認知コミュニケーション』

ション論』東京：大修館書店。

Thavenius, Cecilia (1983) *Referential Pronouns in English Conversation*. Lund: CWK Gleerup.

Thomas, Jenny (1995) *Meaning in Interaction*. London/New York: Longman.

山梨正明 (2004) 『こどばの認知空間』東京：開拓社。

湯本久美子 (2013) 「"Impersonal It 文" の a generalized conceptualizer」『東京大学言語学論集』第 34 号.東京大学,pp. 247-273.

湯本久美子 (2014) 「"It 分裂文"の既成事実効果・個人的責任回避機能」『東京大学言語学論集』第 35 号.東京大学,pp. 297-324.

湯本久美子 (2015) 「話し手・聞き手を指示する英語表現—主体性と客体性から—」『東京大学言語学論集』第 36 号.東京大学,pp.185-217.

Wales, Kathleen (1980) “ ‘Personal’ and ‘Indefinite’ Reference: The users of the Pronoun *ONE* in Present-day English.” *Nottingham Linguistic Circular*. Volume 9, Number 2 December.pp.93-117.

Wales, Katie (1996) *Personal Pronouns in Present-day English*. Cambridge/New York /Melourne/Madrid/Cape Town/Singapore/Sao Paulo: Cambridge University Press.

Wales, Katie (2015) “ ‘Loquor, ergo sum’ ‘I’ and animateness re-considered.” In Gardelle, Laure & Sandrine Sorlin (eds.) *The Pragmatics of Personal Pronouns*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.95-104.

例文出典

Christie, Agatha (1987) *Sparkling Cyanide*. London: Collins.

A Continuum of *It* : From Exophoric *It* to *It*-Cleft

Kumiko Yumoto

yumoto@luce.aoyama.ac.jp

Keywords: *it*, continuum, definiteness, non-human, imposter

Abstract

The present paper argues that *it* is referential and that the exophoric *it*, endophoric *it*, impersonal *it* and *it* in *It*-cleft form a continuum, attempting to find out the factors which underlie this continuity. For this purpose, we firstly define the distinctive features of the exophoric *it*, which is believed to have the clearest referential properties. We find “definiteness”, “in-human” and “imposter - mismatches between the grammatical forms of person markers and their referential value” the basic features of the exphoric *it*. Then,

we confirm that those three features and their extended characters – “wide reference”, “non-deixis”, “topic” and “human defocusing” - are in accord with some of the significant characteristics of the endophoric *it*, the impersonal *it* construction and the *It*-cleft construction. These findings are in accordance with basic principles of Cognitive Grammar, wherein *it* is claimed to be meaningful and the lexicon and grammar form a gradation consisting solely in assemblies of symbolic structures.

(ゆもと・くみこ 青山学院女子短期大学)